



大会総評

国際抜刀道連盟常任理事

大会審判長 野村義隆

今年の全国大会には国内剣士七十四名、海外剣士二十三名、合計九十七名が競技に参加した。競技は、団体戦二十八組八十四名、組太刀三十五組七十名、試斬九十一名、形九十五名、これを審判十六名が採点した。

抜刀道は形、組太刀、試斬が三位一体となって完成する。この三部門すべてに入賞を果たしたのは、鶴誠会的一名だけだった。二部門入賞者は、海外一名、鶴誠会一名であった。

さて、今回は審判の判定について考えてみたい。大会の形競技の採点方法は百点を満点とし、失敗などの減点項目に応じた減点を行なうことになっていく。形の採点は、

- (1) 熟練度や精神力などの全体的な技術水準に対するもの
- (2) 試技の失敗や間違いなどの試技実施時の個別のもの

この二つの面に大別できる。

今年、最初の試技から選手の全体的な基準値を決め、そこから加点と減点を行なった。つまり、まず全体的な技術水準への減点を行なった。この方法は七月の審判講習会で説明して、大会での採用を決め実施した。例えば、最初の所作で「着装の乱れの有無」、「姿勢」と立ち振る舞いの「よし悪し」、次いで最初の試技（抜き付けや納刀、気合い



など)で、体の構え・姿勢、技の熟練度、スピード、リズム、気魄などその選手の「全体的な技術レベル」を判断して基準値を設定する。つまり、①できていない、②まあまあ、③まだまだ、を判断する。そして続く試技で「良い技や気魄ができれば加点し、ミスや失敗、不十分な場合はさらに減点」する。その結果、加点が少なければ点数が七十点代になることもあり得る。このような採点方法を実施したところ、審判による差が大きくてたけがなかった。

その原因は新しい採点方式の徹底が不十分だったからではないか。従来の百点からのミス減点方式の場合は高い点数が出やすく、新方式では低い点数になりやすいので、その差が出たのではないかと考えている。今後の課題として今回の経験を精査して更に検討を進めて改善を測って行きたい。年々レベルアップしている選手たちに負けないよう審判技術の向上を図っていかねばならない。

試斬においては、真横斬りの判定補助として斜めの程度を計る基準メジャーを使用した。畳目一つ以上は斜め斬りとみなされるため、陳先生が制作した畳目メジャーを使って確認したところ、概ね好評であった。今後とも公平な審判法を指して改善して行きたい。

第一回大会を思い浮かべて

国際抜刀道連盟常任理事

八段範士 佐藤 征二

漫談の、きままる曰く「あれから二十年」.....大会も回を重ねること二十回である。開会式も終わり競技が開始され審判席に座った時、フツと第一回大会に出場している自分の姿を思い出した。家に帰り第一回大会のビデオを見ながら思い返してみた。そこには懐かしい今は亡き先生方や剣士の姿がそこにあった。

国際抜刀道連盟は、平成八年衆議院議員の小此木八郎先生を会長に「国際居合抜刀道連盟」として発足した。(平成十一年に「居合」を外し「国際抜刀道連盟」と改称された)この年の七月十九日、山岡鉄舟の命日に、会長小此木先生、中島正夫先生が同行されて、抜刀道総師範の中村泰三郎先生が、当時の総理大臣であった橋本首相に総理官邸において日本刀を献上した。

